

和光大学では、障害を持つ学生が多数入学しており、その様態は実にさまざまでした。見えない人といっても、全盲、弱視、光だけ見える人、など幅広いものでした。障害のある人、ない人が互いに助け合い、支え合って生きていくという建学精神を継承して、それが校風となっていました。そのため、学生生活の風景の中にごくごく当然のように車いすを使う学生がいましたし、スロープがないところは学生が協力し合って運んでいくというような雰囲気でした。

そのような中で、障害者問題研究会というサークル活動を通して、「誰でも楽しめる演劇づくり」について考えるようになりました。大学4年のときに日本ろう者劇団に入団し、俳優としての活動の傍ら、時折、制作事務を手伝うようになったことから、企画全体について考えるようになりました。

英国での体験

ご縁があってダスキン障害者リーダー育成海外研修派遣事業第29期生として英国ロンドンにて2009年9月から1年間、さらに自費で滞在し2010年11月に帰国しました。

ロンドンのフラットでルームメイト4名とともに暮らしながら、Graeae Theatre Company (以下グレイアイ)を拠点に、さまざまな団体で研修を受けました。グレイアイの芸術監督Jenny Sealeyが今回の研修コーディネーターを引き受けてくれました。彼女との出会いは、2007年10月エイブルアートジャパン主催公演「飛び石プロジェクト『血の婚礼』」に出演したことがきっかけでした。聾者でもある彼女は聾者、盲者、車いす利用者がプロの「健常」俳優とともに作品を作り上げ、誰にとっても分かりやすい芝居作りをする方針を持っており、そのやり方はまるで、大学祭で障害者問題研究会として披露した「手話劇」のようでした。みんなが参加出来る演劇をもっと学びたいと希望し、お陰で7か所、のべ23件の研修を受けることが出来ました。そのほかにも自主的にセミナーやワークショップ等に参加しました。

また英国では情報保障(アクセス)が徹底されており、劇場の責任で1公演の間に必ず手話通訳・字幕・音声ガイドを付けることになっています。そのため60本以上の観劇をすることができました。うち40本以上になんらかのアクセスがありました。ウェストエンド等で上演されるような『オペラ座の怪人』『レ・ミゼラブル』などの有名ミュージカルを手話通訳や字幕付きで、まさにリアルタイムで楽しむことができました。それと同時に、日本での観劇環境の貧しさを思いました。2009年当時の日本では台本貸出すらも断るところが多く、小劇場に出演する知人を通して個人的に見せてもらうという形が殆どでした。一部の団体で字幕をつける試みを行っていますが、その費用は全額劇団負担となっています。英国では劇場責任といっても政府からの援助があり、また観客サービスの一環という考え方が普及しており、障害を持つ人の存在を観客動員に結び付けたさまざまな取り組みを行っていました。

とりわけ衝撃を受けたのが、アクセス情報を提供する仕組みが整っている事でした。ロンドン劇場組合が運営している公演情報サイト「Official London Theatre」のコンテンツのひとつとして「アクセス」というページを提供しています(文末ご参照)。手話通訳、字幕、視覚障害のお客様のための音声ガイドがついた公演情報を一覧にしており、公演詳細だけでなく、予約も直接出来るようになっています。ジャンルや日時で絞り込み検索もできます。また、車いす利用者のために

Article—3

みんなで一緒に舞台を楽しもう!!

～特定非営利活動法人シアター・
アクセシビリティ・ネットワークの取り組み～

廣川麻子
Asako Hirokawa

演劇とのかかわり

耳が聞こえない人が演劇をどのように?と思われるかもしれませんが、聴覚障害を持つ私が演劇に関わるようになったのは、実は幼少時にさかのぼります。聴こえない子どもたちのための民間教育施設「母と子の教室(現・聴覚障害児とともに歩む会トライアングル)」の卒業生を中心に結成された「難聴児の劇団エンジェル」での活動が演劇との出会いでした。人前に立って演じることの楽しさから高校演劇での活動につながり、さらに和光大学での学びが大きなきっかけとなりました。

駐車場や施設などの情報も整理されています。予約の連絡先はアクセス担当者直通であることが分かるよう、access@...というメールアドレスとなっています。

もうひとつ、驚いたことは劇場のアクセス担当者にむけた障害理解セミナーの開催でした。これは障害者に芸術を届ける活動をしているチャリティー団体「Shape」で研修した時、セミナー準備をお手伝いしま

したが、プログラムは多岐にわたっており、どのような支援の方法があるのか、それぞれの特性などなど、障害を持つお客様を迎えるにあたっての心構えを学べるようになっていました。そして、講師陣が障害を持つ専門家でした。つまり当事者から学ぶという姿勢が徹底されていました。また、セミナーは午前・午後で5日間のプログラムとなっていました。ブレイクタイムはコーヒーのポットサービス、ランチタイムはバイキング形式の食事も提供をするなど、ホスピタリティが充実していました。受講料もその分、高価でしたが、それでも10人ほどが集まっていました。

帰国してから

現地の聴こえない方に何故このような環境になったのかと尋ねたところ、障害団体が連帯して運動した成果だとの話に、意を強くし、日本でもこのような仕組みを創ることを決意しました。帰国後すぐには出来ませんでしたが、さまざまな幸運により、聴こえない仲間、演劇好きな聴こえる仲間たちの賛同を得て、2012年12月に任意団体として設立しました。それから助成金を得るため、また社会的信用を得るために、2013年7月にNPO法人格を取得しました。

2013年度の活動は、聴こえない人たちの観劇行動の実態をつかむため、全日本ろうあ連盟主催「情報アクセシビリティフォーラム」の展示会場にて意識調査を行いました。聴こえない人と聴こえる人の差があるかどうかをみるため、それぞれ100人ずつに調査をしたところ、興味深い結果が出ました。

劇場に行かない理由として、聴こえる人は「忙しいから」というのが理由にありましたが、聴こえない人は「思い通りに楽しめないから」が一番の理由になっていました。そして、「もしアクセスがあれば行くと思うか?」との問いに「行くと思う」との声が圧倒的に多くありました。さらに「興味のあるジャンルは?」と訊くと、国内最大規模のミュージカル劇団の名前が回答として戻ってくる例がいくつかありました。これはJR等で広告を打っていることからよく見かける、しかしアクセスがないのであきらめている、というようなことが推察されます。

そういったことを踏まえ、2014年度はウェブサイトの構築と、意識調査の規模を拡大し、説得力のあるデータにしていくことにしました。幸いなことに、助成金をセゾン文化財団のほか、日本財団からもいただくことができました。

シアター・アクセシビリティ・ネットワークの取り組み

支援・研究・啓発を柱に、活動の展開をはかっています。

1. 相談支援I(劇場からの相談)

例)「障害を持つお客さまに来ていただきたいが、どのような形がよ



意識調査



活動展示

いのか?」など。

2. 相談支援II(当事者からの相談)

例)「商業演劇で台本貸出を頼みたいがどうしたらいいか?」「磁気ループ[*註:聴覚障害者用補聴器を補助する放送設備]を使って観劇したいがどうしたら?」

3. 公演情報の収集と発信(ウェブサイトの構築、リリース)

アクセシビリティ公演情報サイト <http://ta-net.org/event/>

とりわけ、フェイスブック等の影響力はあなどれない、というのが実感です。なお、ウェブサイトは聴こえない人に仕事をお願いし、雇用の可能性を広げられたのではないかと自負しています。2014年7月にリリースしてから11月現在までに75件の情報を掲載しています。当初は情報を検索し、こちらから問い合わせでは掲載作業をしていましたが、最近は劇団のほうから掲載依頼をしてくれるようになりました。ありがたいことです。こうして繋がるのが大切だと実感しています。

4. 意識調査(アンケート調査)

個人向けの調査を聴こえる方・聴こえない方それぞれ500名ずつに拡大し、また全国的な傾向を知り、なるべく回答の層を広くするため、いろいろな場所で調査協力をよびかけています。

この他に、劇場側の意識もさぐるため、全国の劇場2000か所にアンケートを送りました。さらに、主催団体100か所にも同じ内容を問うものを送りました。発送先の基準として、文化庁からこの3年で500万円以上の助成金をうけている団体に絞り込みました。テレビ局が主催することも増えているので、テレビ局宛にもお出ししました。いわゆる商業演劇を行う団体にも出しています。どれだけの回答が集まるか不安でもあり楽しみでもあり、といったところです。締切を11月としています。すでに160通以上の回答が寄せられております。

情報保障についての認識の有無についてを問う設問では、「知らなかった」という意見が圧倒的多数でした。しかしながら、行動に結びつけることはなかなかむずかしいようでした。興味深い結果が出そうです。集計と分析を行い、2015年3月28日のシンポジウムで発表予定です。

5. 支援研究チーム

2013年度はポータブル字幕提供元や再構成台本、舞台上での手話通訳について実際に観劇した上で意見交換会を行いました。ここで出た意見や意識調査の結果を踏まえて、今年度は手話通訳と字幕表示それぞれの支援方法について様々な可能性をさぐる勉強会を企画しました。

9月は「演劇における舞台手話通訳を考える」として勉強会を開



茶話会(字幕に関する意見交換)



定期総会にて

催し、60名以上の方に参加いただきました。日本で舞台手話通訳の経験を積んでいる人、聴こえない演劇人、通訳と映画・演劇の熱心なファンである人をゲストに招き、演劇における手話通訳の専門性について考えました。

また、2015年1月末に行われる演劇実験室◎万有引力の公演

において文化庁委託事業「平成26年度文化庁戦略的芸術文化創造推進事業」(聴覚障害者の為の、上演用台本の事前貸出)を受けることになったことから、この機会に聴覚障害以外の障害にも対象を拡大し、視覚障害を持つ当事者の方をお招きし、観劇ニーズについてお話を聴く勉強会を11月に行いました。舞台模型製作を日本舞台美術家協会にご協力いただき、舞台模型の新たな可能性についても考えられたらと思っています。

12月10日は字幕に関する勉強会を行います。ポータブル字幕や舞台設置型字幕など様々な方法が出ていますので、一堂に会して現状と課題を整理し、舞台における字幕について演劇人にも積極的に参加いただいて、ともに考える機会となればと願っています。

6. 広報活動(展示や講演などの啓発)

このような取り組みを知っていただく相手先として重要なのは、実は聴こえない当事者です。聴こえない人の場合、手話による演劇活動が盛んではありますが、絶対数が少なく、いつでも常に楽しめるわけではありません。また好みもあります。有名俳優が出ていることで興味を持っても断念するという例、当初から諦めている例などがあります。字幕や手話などの支援があれば楽しむことができるということを、さまざまな集いの中で、展示や講演を通して紹介しています。対話を通して、さまざまな希望や意見、情報を得ており、インターネットで発信するだけでなく、直接、顔を観てお話することの大切さを痛感しています。

今後の展望

現状では、個々の劇団や主催団体の好意により行われており、その経験値が共有されていません。また、気持ちがあっても人的・金

銭的に難しい団体もいらっしゃいますので、観客・主催団体どちらにとってもよりよい観劇支援システムの構築が重要と考えます。どのような形で行うのがよいのか、演劇界全体はもちろん、行政も巻き込んだ議論を行い、世論形成をはかりたいと考えています。

2015年3月28日に森下スタジオでシンポジウム「よりよい観劇支援システムの構築にむけて今できること」を行います。アンケート調査の分析結果、そして万有引力公演での支援モデル実施結果について、当事者団体、演劇関係者を招いて考えていきたいと思っています。そこでの議論を踏まえ、2015年度は委員会を立ち上げ、より効果的な提言をしていくことを目指します。

また、2015年は演劇における専門性をもった手話通訳を養成するためのカリキュラム作成委員会を立ち上げ、モニター講座の企画実施を通して適切な養成方法を検討・提案していきます。さらに英国の視察や海外事例の収集を積極的に行い、現地団体との情報交換を通して、後発組ならではの、日本の事情に合った、よりよい形を探っていけたらと考えています。

聴覚障害だけでなく、観劇に支障を感じているすべての人が自分の希望にあった観劇スタイルで演劇世界を楽しみ、豊かな文化生活を享受できれば、こんな素敵なお話はないと夢を描いています。

ロンドン劇場組合が運営する公演情報サイト「Official London Theatre」の「アクセス」ページのURL:
<http://www.officiallondontheatre.co.uk/access/>



廣川麻子(ひろかわ あさこ)

特定非営利活動法人 シアター・アクセシビリティ・ネットワーク(TA-net) 理事長。1994年、日本ろう者劇団入団。2009年9月~2010年9月、ダスキン障害者リーダー育成海外派遣事業第29期生として英国の劇団Graeae Theatre Companyを拠点に障害者の演劇活動をテーマに研修。この時に観劇における支援制度に衝撃を受け、日本でもこのような仕組みを創りたいと仲間たちとともに2012年12月に観劇支援団体「シアター・アクセシビリティ・ネットワーク」を立ち上げる。2013年4月より個人事務所「ヒロカワ企画」を設立。俳優、制作、ワークショップ、企画運営など演劇を中心とした活動を展開中。

今後の予定:

シンポジウム「よりよい観劇支援システム構築にむけて今できること」

2015年3月28日(土) 午後1時~5時 森下スタジオにて開催(参加無料)

詳細はシアター・アクセシビリティ・ネットワークの下記ウェブサイトにて告知:

<http://ta-net.org/>

viewpoint セゾン文化財団ニュースレター第69号

2014年12月5日発行

編集人: 片山正夫

発行所: 公益財団法人セゾン文化財団

〒104-0061 東京都中央区銀座1-16-1 東貨ビル8F

Tel: 03-3535-5566 Fax: 03-3535-5565

URL: <http://www.saison.or.jp>

E-mail: foundation@saison.or.jp

●次回発行予定: 2015年2月末 ●本ニュースレターをご希望の方は送料(92円)実費負担にてセゾン文化財団までお申し込みください。